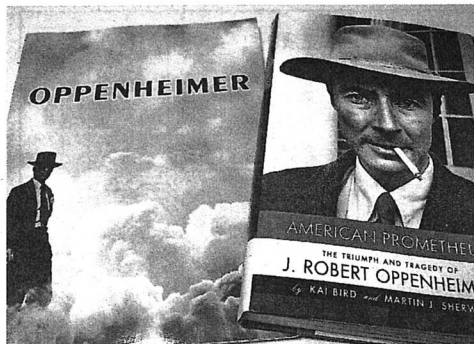




映画「オッペンハイマー」脚本（左）と原本



映画「オッペンハイマー」と核廃絶の道

「原爆の父」が赤狩りの犠牲に

世界初の原爆開発を指揮して「原爆の父」と呼ばれたが、戦後「赤狩りの最も有名な犠牲者」となった理論物理学者オッペンハイマー。その「栄光と悲劇」を描いた映画「オッペンハイマー」(クリストファー・ノーラン監督)が日本でも公開され、話題になっています。オッペンハイマーとは何者か。原爆開発・製造の極秘計画「マンハッタン計画」に詳しい山崎正勝・東京工業大学名誉教授に聞きました。

▼日本は既に負けていた…
米国では「原爆投下は対日戦争勝利に不可欠だった」との正当化論があります。しかし映画ではオープンハイマー(OP)らが「原爆投下がなくても、日本は既に戦争に負けていた」との認識を繰り返して述べています。

▼核禁止協定…OPは情報をソ連と共有して核を国際管理し、核兵器禁止国際協定を結ぶ構想を持っていました。その妨げになるとして水爆開発に反対しましたが、原爆による戦術核保有は支持。

▼原爆投下肯定…OPは原爆投下を「技術的には成功した」と評価。1960年の訪日時も「来日したからといって、この事業の技術的成功に対する私の責任を遺憾には思わない」と述べました。

▼セキュリティ・クリアランス…米国が大核軍拡を進めた54年にO Pが剥奪された保安許可は英語で「セキュリティ・クリアランス」。いま日本の国会で審議中の経済秘密保護法案で導入しようとしている制度と同じです。 坂口明記者

一 脚本 (左) と原本

原子力委員会の聴聞会

映画は1954年の

個人史は複雑で、当時の米国史と深く結びついているので時間がかかった”といっています。

を描いています。ただ水爆開発に反対しても排除されなかった科学者は多数います。

オッペンハイマーは「原爆のことを完全に理解しているのは自分

戦（史上初の核実験）直後のポツダム会談でトルーマン大統領がスティーヴンソンと会談した機会に、その構想を実現しようとしたが、できなかった。そこで次は

想像力の不足

る想像力が不足しているでしょう。映画公開を機に、今も危機的状況にある核兵器問題への関心を深めていただければと思います。

『マール』(05年刊)です。シャーウィンは、原爆開発の経過を描いた『破滅への道程』を出した後、25年かけて、この本を書きました。当初4〜5年で完成

得られる「保安許可」を奪われ、公職追放されます。その理由として映画は、彼が水爆開発に反対したことと、ストロース原子力委員会議長の個人的な恨み

管理し、核軍拡競争に
至らせずに廃絶する」
ことを構想しました。
自分の名声を使えば事
現できると信じていた
のです。

ンハイマーは学者の役
割を超えて政治家の領
域に踏み込み、政治を
動かそうとした。それ
で最後はアイゼンハワ
ー大統領の決裁で排除
されたのです。

惨状を描いていないと指摘されていますが、原本自体それを論じたものではありません。彼は原爆投下の標的選定会議にも参加しました。原爆投下がどんな

映画には原本があります。私の尊敬する歴史家のマーティン・シヤウウィン(2021年没)とカイ・バードの共著『オッペンハウ

から始まり、過去を回想する構成です。背景を知らない、なかなか難しいでしょうね。

オッペンハイマーは聴聞会で、機密情報を

「原爆投下で破壊力を
舞おうとしました。」

水爆開発の段階で実現しようとした。

世界は米ソ冷戦、核軍拡競争の時代に急速に移行していました。

しかし自信家のオッペ

任命された時に分かっていたことです。そう
いう問題があっても厚
爆開発に不可欠だと
して任命されたのです。

自らの政治力過信の末



オッペンハイマー関連年表

1904年4月22日	ニューヨーク市に生まれる
1942年8月13日	マンハッタン計画発足
1943年10月	ロスアラモス研究所長に任命される
1944年9月18日	米英首脳が日本への原爆投下の可能性を確認
1945年5月8日	ドイツ降伏
7月16日	初の核爆発実験（トリニティ実験）成功
24日	ポツダム会談でトルーマンがスターリンに核実験成功を伝達
8月6日	広島に原爆投下
9日	ソ連対日参戦。長崎に原爆投下
1952年11月1日	米が史上初の水爆実験
1954年4月12日 ～5月6日	原子力委聴聞会
6月29日	保安許可が取り消され、公職からの追放が始まる
1960年9月	訪日
1963年12月2日	エンリコ・フェルミ賞を受賞（事実上の名誉回復）
1967年2月18日	喉頭がんで死去